

# 東京・春・音楽祭

-東京のオペラの森 2013-



東京春祭マラソン・コンサート vol.3

ワーグナーとヴェルディ ～生誕 200 年に寄せて

## 第Ⅲ部 ワグネリアン～ワーグナーの影響を受けた人々

日時：2013年3月23日(土) 15:00 開演 会場：東京文化会館 小ホール

### ●フォーレ - メサジェ：パイロイトの思い出

1888年に書かれたもので、フォーレの楽曲の中でも異色の作品である。パイロイトのワーグナーを体験した感動から、フォーレとメサジェがともに並んでピアノに座り、熱狂的な興奮の中で《ニーベルングの指環》からのパラフレーズを競い合う情景が目に浮かぶような曲である。

### ●ブルックナーのピアノ作品

回想 Erinnerung

秋の夕べの静かな物思い Stille Betrachtung an einem Herbstabend

ブルックナーもまた熱烈なワグネリアンだった。今回演奏されるのは、ブルックナーが40代前半(交響曲第1番の前後)に作曲し、それぞれピアノの弟子に捧げられたピアノ作品である。

### ●ニーチェのピアノ作品

序奏 Einleitung

プスタの月の光の中で Im Mondschein auf der Puszta

我らが先祖の記憶(2つのポーランド舞曲)

Unserer Altvordern eingedenk (Zwei polnische Tänze)

マズルカ Mazurka

居酒屋より Aus der Czarda

19世紀ドイツを代表する哲学者ニーチェも、一時はワーグナーの熱烈な信奉者だった。2人は1868年秋にライプツィヒで出会い、それから10年ほどは親しい間柄だったが、やがて訣別する。ニーチェは10代の頃から独学で作曲を始めたが、今回演奏されるピアノ作品はすべて20歳前、ニーチェが青年の頃に書かれたものである。

### ●リスト - ワグナー：

歌劇《タンホイザー》より「夕星の歌」レチタティーヴォとロマンス S. 380

原曲は、1845年初演のワーグナーの歌劇《タンホイザー》第3幕第2場において、タンホイザーの親友ヴォルフラムが歌う「夕星の歌」。1848年、リストによってピアノ用に編曲され、1852年にはピアノとチェロのための編曲も行われた。夜の詩情に満ちた愛の歌があますところなく表現されている。

●マーラー (デレヴィヤンコ編) : 《亡き子をしのぶ歌》より

1. いま晴れやかに陽が昇る

I. Nun will die Sonn' so hell aufgeh'n !

2. なぜそんなに暗い眼差しだったのか、今にしてよくわかる

II. Nun seh' ich wohl, warum so dunkle Flammen

原曲は、1905年に初演されたオーケストラ伴奏付の声楽曲《亡き子をしのぶ歌》(全5曲)の第1曲と第2曲。この連作歌曲は、我が子を亡くした体験をもとにリュッケルトが書いた詩にマーラーが曲を付けたもので、マーラーもこの初演の2年後、愛娘を亡くしてしまう。しかし作曲当時、自分が子を喪っていたらこの曲は書けなかっただろうと、マーラーは後に述懐している。

●ブルックナー (マーラー編) : 交響曲第3番ニ短調《ワグナー》より第2楽章

ブルックナーの交響曲第3番はワグナーに献呈されたことから《ワグナー》の愛称でも親しまれている。1873年末に完成された初稿はワグナー作品からの引用に満ちているが、その後、大幅な改訂が重ねられた。第2稿の初演(1877年)の際には、17歳の若きマーラーが立ち会っていたというのも有名な逸話である。マーラーはクルジザノフスキ(終楽章のみ担当)と共同で、この第2稿をピアノ連弾用に編曲して1878年に出版した。第2楽章アダージョは、マーラーの編曲による。